

# 地域おこし協力隊通信

第20回



発表を聴く生徒と  
来場者（会場の様子）←



→7つのテーマに分かれ、発表に臨む地域ビジネス科の1・2年生



シンポジウム終了後には、高校生から大学生・市民サポーターに向けて感謝の色紙が手渡された



リポーター…  
森山健吾 隊員

皆さん、明けましておめでとうございませう。今年も宜しく願います。さて、20回目となる今回の協力隊通信は、昨年11月に実施された「潮来まちづくりシンポジウム2020」の話題をお届けします。

昨年8月からスタートした筑波大学と潮来高校による地域連携事業（高大連携）。高校生が考えたまちづくり案を市民の方向けに発表する場としてこのシンポジウムは実施されました。朝早くから資料の確認、読み合わせなど最終確認を行う生徒たち。その後、本番に臨んだ生徒たちは、大勢の方を前に緊張した様子でしたが、自分たちの考えや想いを伝えたいという気持ちが見ているこちらにも伝わってきました。また、第二部のトークショーに登壇した生徒代表も堂々と自身

の考えを話す様子が見られました。

今回のシンポジウムはもろろ、高大連携には自分も市民サポーターとして参加してききました。グループに入り、活発な意見交換ができるようにアドバイスや助言を行いました。また、活動の様子も撮影し、生徒の頑張りを発信してききました。

シンポジウムを終え、今年度は一区切りとなりますが、3年の事業となる高大連携は来年度も継続して実施される予定です。今後どのような展開を見せていくのか楽しみですね。ぜひ、その動向にご注目いただければと思います！

シンポジウムの様子をまとめた動画、グループの発表ごとにまとめ動画を制作しました。ぜひ、ご覧ください！！



## まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

### 潮来市の誇れる自然

第59回

#### 冬の白い鳥ーハクチョウ類、ミサゴ

コロナ禍で自粛ムード。いつもと違う年末年始でしたが、寒さは例年通り。年末から幾度も寒波が到来し、潮来市内も朝夕はとても寒いです。ただ、冬ならではの楽しみがあります。北浦の水原地先に飛来するハクチョウです。例年100羽ほどが飛来し、今年も来ています。地元の方々による保護活動によって、この優雅な姿が見られます。

さでフラフラしながら湖面ストレスを飛び、杭までたどり着きます（写真には、杭で魚を食べているところ）。魚採りに明け暮れる姿を目撃できると、何だか清々しい気分になります。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション

加納 光樹

水原地先でよく見られるハクチョウは、主にオオハクチョウとコブハクチョウです。オオハクチョウは、くちばしの半分以上が黄色なのが特徴。ユーラシア大陸北部で繁殖し、日本の湖沼には越冬のために飛来します。体が灰色の幼鳥も見られます。一方、コブハクチョウは、くちばしがオレンジ色で、その付け根の黒いコブが特徴。1950年代にヨーロッパから持ち込まれ、公園やお濠、動物園などで飼育されていますが、その後、野生化し定着しました。県内の一部の湖沼でも繁殖しています。北海道で繁殖し県内へと渡ってくる個体もいることがわかっています。

冬の北浦では、白い顔で目を通る黒褐色線がクルンタカの仲間「ミサゴ（写真）」も見かけます。今冬は、水原から釜谷のあたりに2羽が居着いています。魚を専門に狙うハンターで、湖面の上空で停空飛翔し、魚を見つくと急降下して、水面付近で脚を使って捕まえます。ときには30cmほどのボラやフナを両脚でつかみ、その重



北浦のオオハクチョウ  
(2020年1月撮影)



北浦のミサゴ 足元に魚  
(2020年12月撮影)